

ゆっくりだっっていいんだよ

第三瑞光小学校 二年

平野 琉翔

やなぎ田先生こんにちは。ぼくは「マルマくんカエルになる」という本を読みました。

マルマくんはカエルなのにおよげません。まだ、おたまじゃくしのしっぽがのこっているからです。そして、およげないことをほかのカエルにばかにされて、かなしい気もちになってしまいました。

ぼくもおなじようなことがありました。ぼくはすこし、しゃべることがにがてです。か行とさ行をうまく言えないので、ともだちにからかわれて、とてもいやな気もちになって、かなしくなりました。

マルマくんは、ガマ先生にあっておよぎ方を教

えてもらいます。ガマ先生は、「こまったことがおきたらしずかによくかんがえること。そして、べんきょうすること。するとこまったことはすこしずつすてきなことにかわっていくよ」といっています。そしてマルマくんは、べんきょうをしておよげるようになりました。

ぼくも、からかわれていやな気もちになっても、どうしたら、うまくしゃべれるかよく考えてみよう、ことばの教室も行きたくないと思っていただ、べんきょうに行ってみようと思いました。そうしたら、マルマくんがゆっくりでもおよげるようになったみたいにもぼくもゆっくりでもスラスラしゃべれるようになって、うれしい気もちになると思いました。

柳田邦男先生からのメッセージ

〈優秀賞〉

平野 琉翔くんへ

平野くんは、しゃべることがにがてなんですね。よくすなおに自分のにがてなことを書いてくれました。

スラスラしゃべれなくても、それははずかしいことではないよ。

外国の絵本で最近日本でもほんやくされた『ぼくは川のように話す』（偕成社）というすばらしい本があります。主人公の少年は、うまくしゃべれないので、小学校でみんなに笑われて辛い思いをしている。

ある日、お父さんが放課後、少年を車に乗せて大

きな川べりに連れていく。アメンボ探しをした後、お父さんは少年の肩を抱き寄せて言う。

「ほら、川の水を見てみる。あれが、おまえの話し方だ」

川はゆったりと流れるところもあれば、急流になって波立つところもある。流れがよどんでいるところもある。

「おまえは、川のように話してるんだ」

川は自然にまかせて急流になったりよどんだりしている。ずっと急流を続けるのではない。おまえもすべて急流のようにスラスラ話せなくていいんだ。ありのままの自分のペースで話せばいいんだ。—お父さんは、そんな意味をこめて少年に話したのだ。

少年は川に入り、ゆっくりと泳ぎながら、自分に

語りかけるのです。

「泣いてしまいそうなときは、このことばを思い出そう。――ぼくは川のように話す。」

明日、学校へいき、みんなのまえで、堂々とした川を思い浮かべて、川のように話そう

少年は、そう決意したのだ。

この絵本は、ぼくから賞の贈呈式の日平野くんにプレゼントするね。

平野くんは、絵本『マルマくんカエルになる』を読んで、主人公のカエル・マルマくんがまだおたまじやくしのしっぽが残っていてうまく泳げないけれど、ガマ先生に、「こまったことがおきたらよくかんがえてベンキョウすること」と教えられて、教えを実行し泳げるようになったことに心を動かされ、「どうしたらうまくしゃべるかよく考え、こと

ばの教室にベンキョウにいつてみよう」と思うようになったのですね。その決意は、とてもだいじな第一歩だと思います。あの『ぼくは川の流れのように話す』の少年の決意と同じように重い決心だと思えます。

平野くんに会える日を楽しみにしています。